

# 菅原東遺跡出土の石製品・玉類

## - 古墳時代前～中期における菅原東遺跡の研究IV -

村瀬 陸

### I はじめに

本稿は、菅原東遺跡から出土した古墳時代前～中期の石製品・玉類について報告することを目的とする。

菅原東遺跡出土遺物については、筆者が継続的に資料報告を行なってきた（村瀬 2016・2018・2021a・b）。この成果によれば、菅原東遺跡は古墳時代前期中頃に成立し、出土土器の様相から南約 500m に位置する宝来山古墳の造営期間と概ね消長が一致する（村瀬 2021a）。また、菅原東遺跡で宝来山古墳出土埴輪の特徴に似る同時期の埴輪が出土していることも確認した（村瀬 2018）。そして、宝来山古墳への埋葬や祭祀等が終了した段階にあたる古墳時代前期末～中期初頭に、菅原東遺跡は一度廃絶するという特徴がある。次に遺跡が再開発されるのが、古墳時代中期末～後期で、埴輪生産遺跡としての性格が強調される。遺跡所在地の地名が菅原であることなどから、菅原土師氏との関連が古くから指摘されており（直木 1960）、上述した特異な集落消長である性格などを史的成果と合わせて筆者も評価したことがある（村瀬編 2021b）。

菅原東遺跡の主な出土土器・埴輪は資料報告を行なつてきたが、石製品・玉類にも未報告のものを確認した。今後、総合的な菅原東遺跡の評価を行う上で重要な資料であるため報告する。このほか、奈良市が所蔵する古墳時代の石製品には合子、石鉈、紡錘車形石製品があり、菅原東遺跡出土資料と混同しないよう合わせて報告しておきたい。

### II 菅原東遺跡出土の石製品・玉類

菅原東遺跡で出土した石製品・玉類には、緑色凝灰岩未製品 1 点、碧玉未製品 1 点、車輪石 1 点、石鉈 1 点、管玉 8 点、ガラス小玉 3 点、滑石製白玉 2 点がある。

#### i 緑色凝灰岩未製品（1）

概要報告では HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 出土とされているが、居館に重複するピットから出土したものである。臼形を呈し、上面径 2.5cm、下面径 4.0cm、高さ 3.0cm である。材質は岡寺分類の材質 II である（岡寺 1999）。上下面是いずれも磨かれて平滑で、側面は粗割状態である。なんらかの石製品を作るための未製品とみられ、石材産出地ではなく消費地で製品化していた可能性を示す一例として評価できる。



図 1 報告する出土遺物の調査地と菅原東遺跡

#### ii 碧玉未製品（2）

HJ 第 256 次調査の居館付近の下層包含層から出土している。長さ 5.5cm、幅 4.0cm、高さ 2.4cm である。濃緑色を呈する材質 I で、全面が粗割状態である。管玉等の未製品である可能性が考えられる。

#### iii 車輪石（3）

HJ 第 257-3 次調査の方形区画溝 SX22 から出土した。緑色凝灰岩製で石材に葉理がみられる材質 IV である。全体の約 1 / 5 が遺存する。環体幅 6.2 ~ 6.7cm、厚さ 1.7cm である。表面は森下分類の山谷式である（森下 2005）。底面はやや上げ底で、内孔はやや丸みをもって立ち上がる。

#### iv 石鉈（4）

HJ 第 257-2 次調査の溝 SD04 から出土した。やや軟質の緑色凝灰岩製で材質 III である。全体の約 1 / 6 が遺

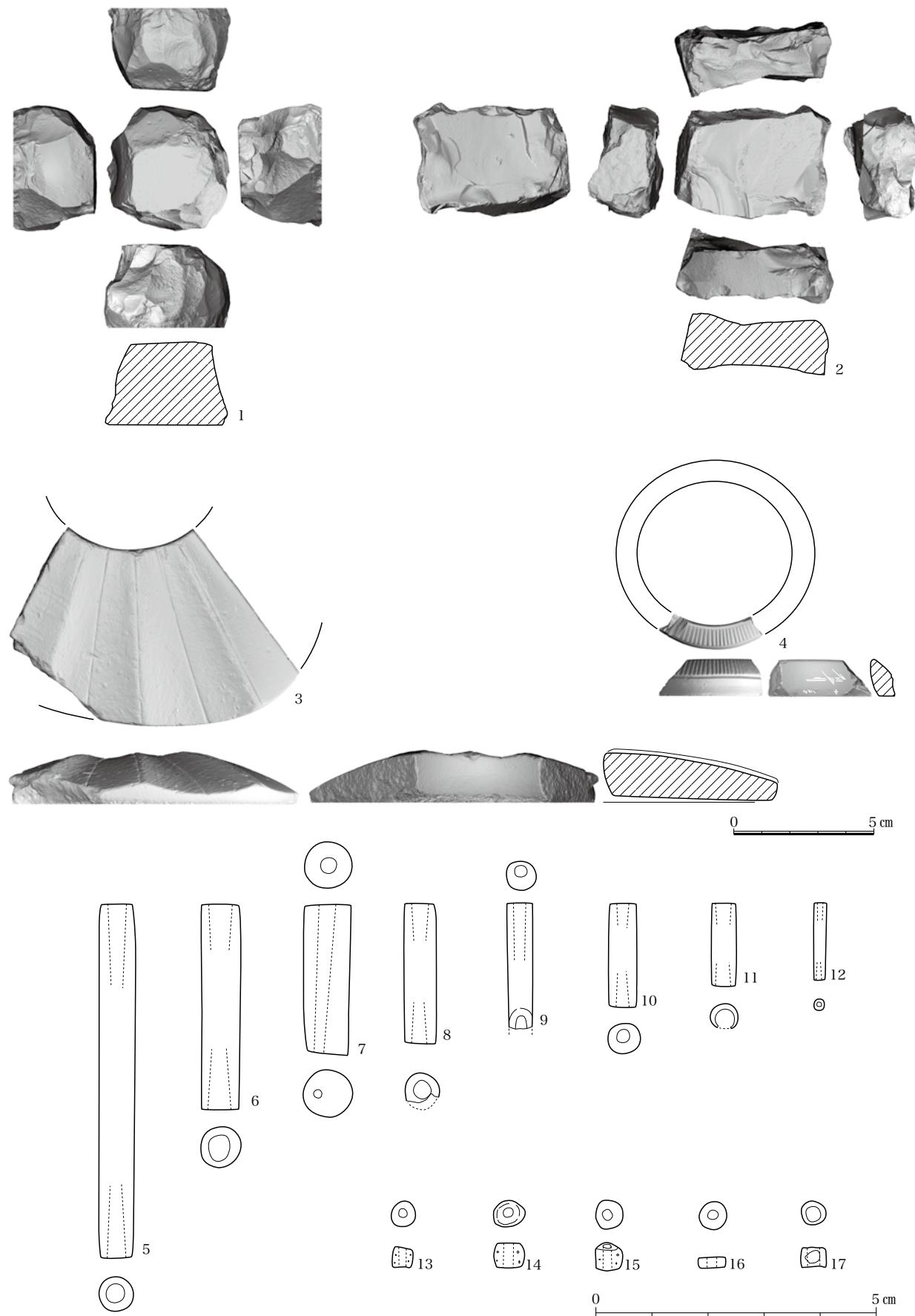


図2 菅原東遺跡で出土した石製品（1～4：1/2）と玉類（5～17：1/1）

存する。外面の上半部斜面には沈線が放射状に刻まれ、側面は1条の沈線を挟んで凹線をまわす一凹式である。内孔は回転性のある擦痕の上に斜め方向の擦痕が観察できる。高さ1.2cmで復元すると外径7.0cm、内径5.4cmである。

#### v 管玉（5～12）

5は、HJ第169次調査の包含層から出土した。濃緑色を呈する材質IIで、長さ6.3cm、直径0.6cmである。両面穿孔である。

6は、HJ第256次調査の居館付近の包含層から出土した。灰褐色を呈するが材質の印象は碧玉に近いもので、岡寺分類に当てはまらない。長さ3.7cm、直径0.7cmで、両面穿孔である。

7は、HJ第326-1次調査の土坑SK43<sup>(註1)</sup>から出土した。濃緑色を呈する材質IIで、長さ2.7cm、直径0.9cmとやや短く太い印象をもつ。穿孔は片側が0.3cmなのに対し、もう一方が0.1cmと小さく片面穿孔である。

8は、HJ第257-4次調査の溝SD01から出土した。

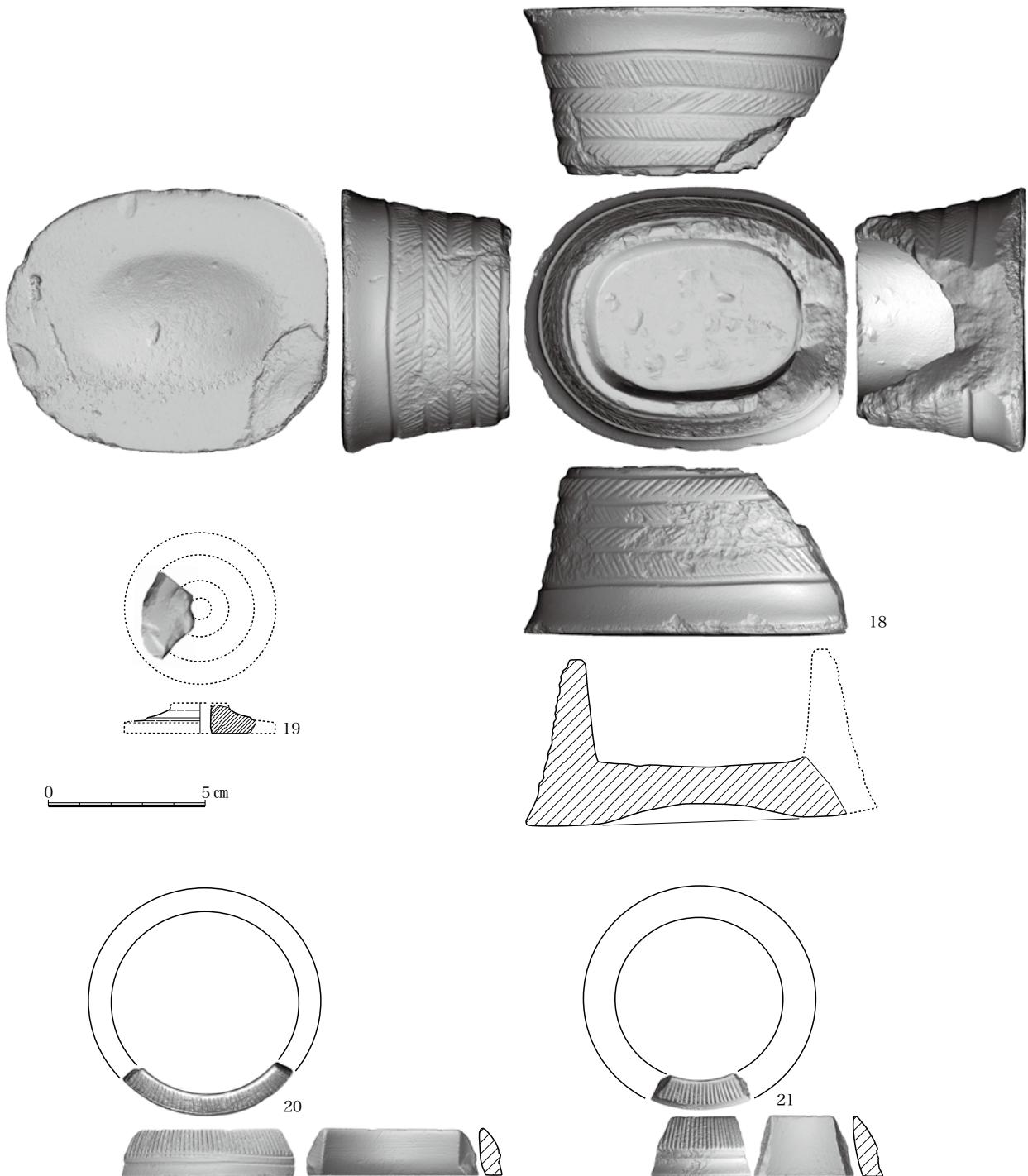


図3 その他の遺跡から出土した石製品（18～21：1/2）

淡緑色を呈する材質IIIで、長さ2.5cm、直径0.6cmである。両面穿孔である。

9は、HJ第257-2次調査の溝SD04から石鉤と共に出土した。淡緑色を呈する材質IIIで、片側の端部が欠損しているが長さ2.2cm以上、直径0.6cmである。両面穿孔の可能性が高い。

10は、HJ第257-3次調査の古墳時代盛土下で検出した土坑下層のピット内から出土した。淡緑色を呈する材質IIIで、長さ1.9cm、直径0.6cmである。両面穿孔である。

11は、HJ第276次調査のピット内から出土した。濃緑灰色を呈し滑石製の可能性が高い。一部欠損しているが、長さ1.5cm、直径0.5cmで両面穿孔である。

12は、HJ第443-7次調査の谷状落ち込みから出土した。濃緑色を呈する材質IIで、長さ1.4cm、直径0.2cmと小さく細い。両面穿孔である。

#### vi ガラス小玉（13～15）

13は、HJ第326-1次調査のピット内から出土した。濃青色を呈し直径0.45cm、高さ0.4cmである。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。

14・15は、HJ第257-3次調査の方形区画溝SX22下層から出土した。14は濃青色を呈し、形状はやや不整形で直径は0.5～0.6cm、高さ0.5cmである。上下の端面が削られて平滑に仕上げられている。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。15は濃青色を呈し、直径0.5cm、高さ0.5cmである。引きのばし法により作られ、気泡が内部に観察できる。

#### vii 玉（16・17）

16・17は、HJ第257-3次調査の方形区画溝SX22下層から出土した。16は、灰黒色を呈する滑石製で直径0.5cm、高さ0.2cmである。17は16よりも濃い灰黒色を呈する滑石製で直径0.5cm、高さ0.4cmである。側面にも穴があけられている。

### III 他の遺跡から出土した石製品

#### i 奈良町遺跡出土石製合子（18）

HJ第258次調査で鎌倉時代の井戸SE03から出土した。材質IIIで身のみであり、一部欠損する。平面楕円形で底部は裾が広がり、底面中央が窪む。口縁部の短径6.0cm、底部の短径8.3cm、高さ5.4cm、身の深さは3.4cmである。外面に4条の沈線を横方向に施し、条間に綾杉文を線刻する。底部外面の一部に赤色顔料が付着する。また、同調査では埴輪編年II期の円筒埴輪片が出土しており（村瀬2020）、付近にあった前期古墳が

壊されて、なんらかの要因で井戸に紛れ込んだものと思われる。

#### ii 奈良町遺跡出土紡錘車形石製品（19）

HJ第650次調査で江戸時代の土坑SK49から出土した。材質IIIで、長さ2.8cm、高さ0.9cmの小片である。中央に復原径0.7cmの穿孔がある。底面は平坦で同心円状に2つの段をめぐらせている。

#### iii 柏木遺跡出土石鉤（20）

HJ第249次調査の溝SD12から出土した。SD12では布留1式後半～2式に相当する土器群が出土している。材質IIIで全体の約1/4が遺存しており、高さ1.4cmで、復元すると外径7.4cm、内径6.0cmである。側面形態は谷式で、内孔には回転性をもつ擦痕がみられる。

#### iv 佐紀遺跡出土石鉤（21）

HJ第421次調査の溝SD04から出土した。材質IIIで全体の約1/8程度が遺存する。高さ1.8cmで、復元すると外径7.4cm、内径6.0cmである。斜面は高式で、側面は2条の凹線をまわす二凹式である。

## IV 考察

#### i 石製品からみた菅原東遺跡

集落で出土する腕輪形石製品は、破片資料であることや、居館・祭祀関連の遺跡に目立つことなどから破碎埋納に関わる祭祀遺物との指摘がある（北條1994）。菅原東遺跡出土の腕輪形石製品については、三浦俊明が集落出土資料の開始期を評価する上で取り上げている（三浦2012）。また、高橋幸治は福井県坂井平野付近の石材産出地からの流通ルートを経た首長居館での出土品として位置づけている（高橋2010a）。

ここで新たに考察できることは少ないが、合わせて紹介した柏木遺跡溝SD12も方形区画溝になる可能性があるので、東側には前期末～中期後半の古墳群が広がるとみられる（村瀬2017）。佐紀遺跡出土品は、高橋集成（高橋2010b）から漏れているもので、これまであまり知られていないかった資料である。溝SD04は布留式新相～TK208型式までの土器を含み、佐紀古墳群西群に近くその関連を想定できる。これらはいずれも破片資料であり、なおかつ大型古墳群が立地する居館的性格の強い集落遺跡から出土していることからみても、北條の見解を追認する資料であるといえる。ただし、出土量としては1点程度で、その傾向は全国的に同様であるため、最初から祭祀用に用意したというよりは、なんらかの原因で割れてしまったものを再利用した程度のものであろう。

## ii 管玉からみた菅原東遺跡

管玉についても、古墳出土品が多数を占めるが、集落で出土する事例も腕輪形石製品に比べれば多い。ただし、その出土は祭祀的性格の強い遺構からみられる場合が多く、菅原東遺跡に近い西大寺旧境内の調査でも布留2式の土坑に祭祀土器とともに管玉が納められていた事例がある（奈良市教育委員会 2017）。

菅原東遺跡で出土した管玉は、方形区画溝 SX22 から出土したものがあるほかは、包含層などから出土したものが多く、遺構の性格と合わせて検討できる資料に乏し

い。ここでは、管玉自体がもつ性格から菅原東遺跡について考察する。

古墳時代前期の管玉は、その直径と全長から傾向を抽出した廣瀬時習の分析があり（廣瀬 1994）、古墳時代全体を通して生産と流通を米田克彦が示した（米田 2006）。これらをさらに網羅的に深めた大賀克彦の研究（大賀 2010）が現状の到達点といえよう。

そこで、大賀が作成した図に報告した管玉を重ねた（図4）。古墳時代前～中期における菅原東遺跡の存続時期は、布留1式新相～布留4式古相であり、概ね大賀編年

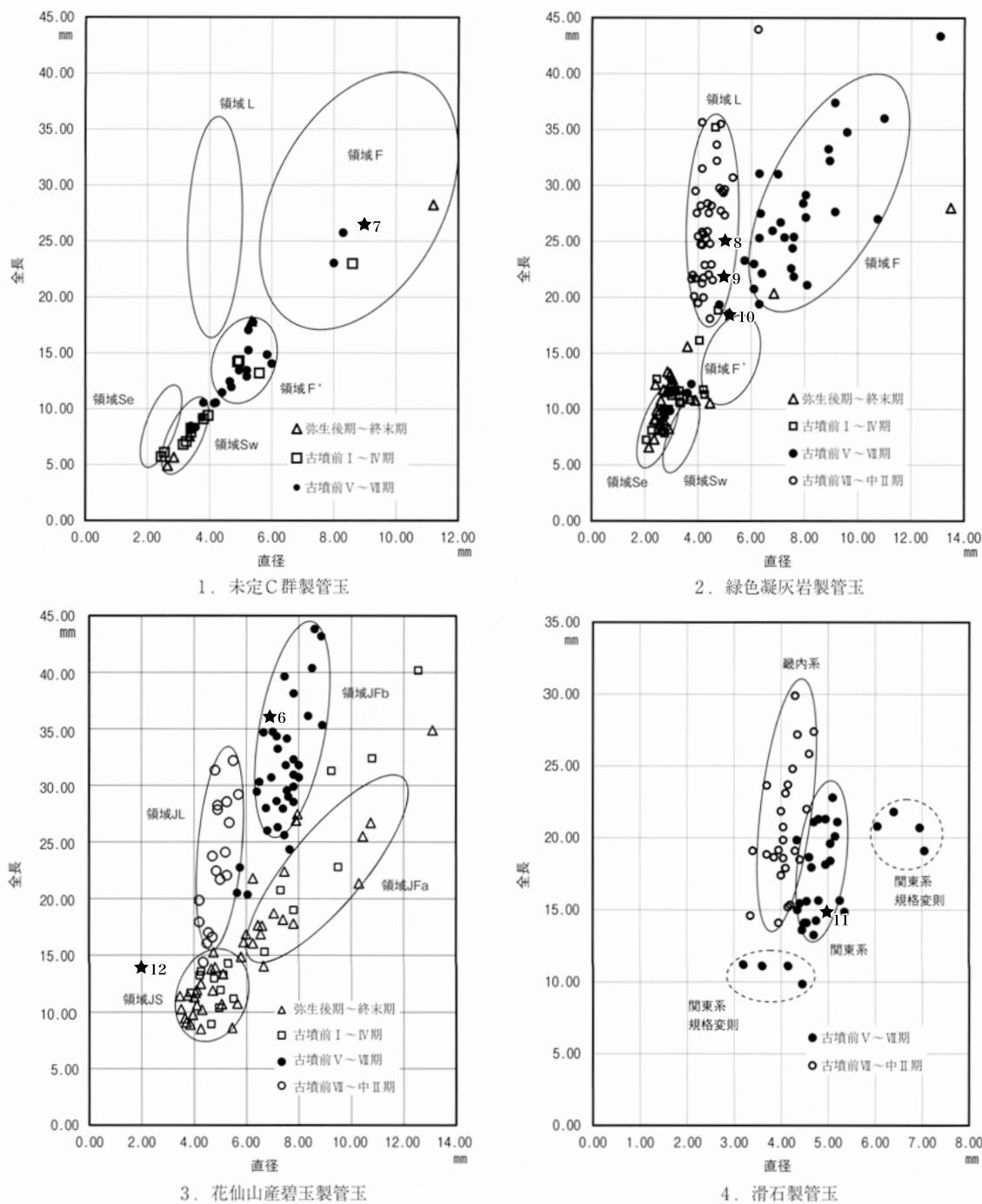


図4 菅原東遺跡出土管玉の材質別分布（★が菅原東遺跡出土資料）

前V～VII期に該当する。したがって、報告した管玉は遺構出土品でないものが含まれるが、概ねこの時期幅のなかにおさまることが想定できる。

結果として、基本的に大賀編年前V～VII期の様相をまとめた領域におさまっていることがわかる。逆説的に前述した想定が正しいことを裏づける。しかし、緑色凝灰岩製管玉は、大賀編年前VII～中II期の領域Lにまとまる傾向があり、その他の材質のものに比べて、緑色凝灰岩製管玉は遅れて製作されたものとみることができるものかもしれない。

また、滑石製とした11は、関東系の領域におさまる。菅原東遺跡では今のところ関東系の土器類は出土していないが、ウワナベ越え沿いに所在する長谷遺跡では、関東系の土器類の出土が知られている（中野ほか2019）。長谷遺跡は時期的に後出するものと考えられるが、佐紀古墳群と関東を結ぶ事例として紹介しておきたい。

最後にこの分布図におさまらないものとして、5と12がある。5は長さ6.3cm、直径0.6cmで古墳時代前期でみれば弁天山C1号墳（大賀編年前IV期：長さ6.9cm、直径1.4cm）、新沢500号墳（大賀編年前V期：長さ6.5cm、直径1.9cm）に6cmを越えるものがあるが、類例は比較的少なく、菅原東遺跡出土品は直径が小さく細長い。長い管玉が出現するのは、大賀の表からみて前V期以降にそういった現象が起こるようである。したがって、時期的に問題ないものであるが、出土事例が首長墳である点からして、佐紀古墳群に供給されることを見越したものであった可能性がある。HJ第169次調査周辺では短期間に建て替えのある堅穴建物・土坑群が密集するエリアで、筆者は宝来山古墳の造営キャンプである可能性を述べている（村瀬2021a）。そういう大型古墳へ副葬を予定していたものがなんらかの原因で取り残されたと考えることもできよう。

12は、非常に細く短いという特徴を抽出できるが、筆者の力量不足で評価できず今後の課題としたい。

## V おわりに

本稿では、菅原東遺跡出土石製品・玉類についてを報告し、若干の考察を加えて評価を行なった。その結果、石製品は既往の認識を追認することとなり、管玉については古墳時代前期後半に通有のもののが多数であることから、想定される菅原東遺跡の存続時期を補足する資料であることを明らかにした。他方、管玉の一部には細長いものが存在し、同様の管玉が近畿地方における有力古墳から出土している。出土地点が宝来山古墳の造営キャン

プ地に想定されることから、宝来山古墳に副葬が予定されていた可能性が想定できることを述べた。

筆者の評価に誤りがある部分もあるうが、本稿で提示した資料自体は菅原東遺跡や佐紀古墳群に関連する重要な資料であるため、活用されることを望みたい。

（村瀬 陸）

註1) 概要報告に遺構番号がなく、調査時の遺構番号

### 引用文献

- 大賀克彦 2010「東大寺山古墳出土玉類の考古学的評価」『東大寺山古墳の研究』東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館  
岡寺良 1999「石製品研究の新視点・材質・製作技法に着目した視点-」『考古学ジャーナル』453 ニュー・サイエンス社  
高橋幸治 2010a「腕輪形石製品の流通 - 集落出土品を中心に -」『古代学研究』187 古代学研究会  
高橋幸治 2010b「集落関連遺跡出土の腕輪形・宝器類石製品集成表」『古代学研究』187 古代学研究会  
直木孝次郎 1960「土師氏の研究」『人文研究』11-9 大阪市立大学文学部  
中野咲ほか 2019「古墳時代中期における大和と投獄の地域間交流 - 奈良県長谷遺跡出土土器の分析を中心に -」『日本考古学協会第85回総会研究発表要旨』日本考古学協会  
廣瀬時習 1994「玉副葬の意義 - 前期古墳に見る管玉の副葬について -」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズ刊行会  
北條芳隆 1994「石川条里遺跡と腕輪形石製品」『中部高地の考古学IV』長野県考古学会  
三浦俊明 2012「古墳時代前期における石製品の流通」『石川県立博物館紀要』24 石川県立博物館  
村瀬陸 2016「菅原東遺跡の首長居館出土土器」『古墳出現期土器研究』4 古墳出現期土器研究会  
村瀬陸 2017「南新コモ川古墳の研究 - 甲冑埴輪の位置づけを中心に -」『埴輪論叢』7 墓輪検討会  
村瀬陸 2018「HJ第229・443-7次出土埴輪からみた菅原東遺跡と宝来山古墳」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成27年度』奈良市教育委員会  
村瀬陸 2020「平城京城の埋没前期古墳とその埴輪」『埴輪論叢』10 墓輪検討会  
村瀬陸 2021a「菅原東遺跡の堅穴建物・土坑群出土土器」『奈良市埋蔵文化財調査年報 平成30年度』奈良市教育委員会  
村瀬陸 2021b「古墳時代後期埴輪生産からみた菅原土師氏の実証的研究」『研究紀要』25 由良大和古代文化研究協会  
森下章司 2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』89-1 日本考古学会  
米田克彦 2006「古墳時代管玉の生産と流通」『季刊考古学』94 雄山閣